

「パブリック」で考える歴史的市街地空間と人間の係わり方 —世界遺産マラッカとジョージタウンの比較から—

Relation between Historic Town Space and People in the thinking of 'Public'
Comparison of Melaka and George Town World Heritage Sites

張 漢賢（鳥取環境大学） CHONG, Hon Shyan（Tottori University of Environmental Studies）

1. ひっくり返される空間の意味

都市と建築の計画・設計において、空間の領域をアクセス・利用の視点で定義しようとする時、しばしば「パブリック／プライベート」の概念が用いられる：不特定多数の人がアクセスできる「パブリックな空間」、個人または限定された人々しかアクセスできない「プライベートな空間」。アクセス・利用をコントロールする意味を含み、「パブリックとは、集団的に維持管理され誰でもいつでも立ち入れる領域であり、プライベートとはその維持管理に責任ある人や小さなグループによって立入りの可否が決められる領域¹⁾」として捉えることができる。

「パブリック／プライベート」の関係は入れ子構造のように、利用者、管理者に誰を含むか含まないかという相対関係、領域の重層性により、空間の「パブリック／プライベート」が逆転する場合もある。

例として「リビング・ルーム」：個人や家族からみれば、住宅の寝室は個人のためのプライベートな空間に対し、リビング・ルームは家族なら誰でも利用できるパブリック性の高い空間である。しかし招かれなければリビング・ルームには上がれない隣人を含んで考える場合、リビング・ルームはプライベートな空間となる。リビング・ルームがもつこの二重の意味は、それを取り巻く物理的な空間と、家族・地域の生活の営みの相互関係から生成されたものである。

もしこの様相に対し、更なる価値が発見・付与され、共有資源としてより多くの人がアクセス・利用できるように維持管理すべきとされた場合、これまでと異なった範疇の「パブリック」がその上にオーバーラップされることになる。完全なパブリックな空間は、誰に対してもオープンであり、誰でも自由にアクセスできる空間であるはず。このパブリックな空間は、あらゆる人々の席＝場所が「設けられている」空間であり、利用者が自由に各自の感受性や価値観をもって自己確認できる場である。

空間の計画・設計の視点では、そこに次元が異なった二つの課題がある。（1）席＝場所の提供を可能にする空間の質の確保が必要と同時に、従来空間の等質性の維

持・改善または前者との矛盾への理解。（2）この「パブリックな空間」の目指すもの。

「パブリック性（公共性）」は、「同一化・固定する意志」（排他性）と、「複数価値を共有する意志」（開放性）の二面性をもっており、この排他性と開放性が拮抗し現れる存在であると認識できる。この拮抗は、同一化の過程に持ち込まれる「アイデンティティ²⁾」を、誰に向き合っ

て確立しようとするかにより、様相が変わってくる。多様な捉え方で現れる「パブリック」の存在が、都市空間の重層性を体現し、拮抗する排他性と開放性は、都市・建築文化を形作る源泉であるとも言える。生活者が自分でコントロールし守るべき生活環境は、どこまでの領域に包摂されるのが「適切」であるか。また、世界を対象にしてアイデンティティを主張する必要性自体は、この時代にとってどのような意味をもつか。この問いかけは前述（2）そのものでもある。

2. 世界遺産マラッカとジョージタウン

（1）位置と概況

マレーシアのマラッカとジョージタウンは、マレー半島の西海岸に位置し、東西の海路を結ぶマラッカ海峡に面している歴史都市である。ジョージタウン（ペナン）は、タイ、スマトラ北端のアチェが近い半島の北部にあり、マラッカは半島南端のシンガポール、リアウ諸島に近い位置にある。

マラッカは王国の建国、ポルトガル、オランダ、イギリスの植民支配を経験し、600年の歴史をもっている都市である。ジョージタウンはイギリス人が建設した海港都市であり、200年の歴史を有する。2008年、両都市が「マラッカ海峡の歴史都市—マラッカとジョージタウン」として、世界文化遺産に登録されている。「海峡」という言葉から、英領「海峡植民地³⁾」のペナン、マラッカ、シンガポール3都市を容易に想起できるが、シンガポールは1965年にマレーシアから独立しており、この登録は、マレーシア側の両都市だけが対象となる。マレーシアでは自然遺産の登録経験があり、世界文化遺産の登録は初めてである。

世界遺産としてマラッカのプロパティ面積は4.51ha、建物はおよそ600棟ある。ジョージタウンのプロパティは150.04ha、建物はおよそ1700棟ある。両都市とも、世界遺産の登録前から観光客が賑わう歴史都市である。

(2) 都市的コンテクスト

ヨーロッパ植民地勢力のみならず、両都市はアラブ世界、インド、中国文化の影響を受けやすい地理的位置にあり、海港都市として人と物をひろく受け入れるオープンな風土をもっている。植民地勢力の盛衰、絶えることのなかった出身地別商人の滞在・居住によるコミュニティの沈積と流動が、マラッカとジョージタウンの多文化共存の都市形態を形成している。変化が多様性をもたらし、季節風＝モンスーンが痕跡を刻む時間を与え続けていた。

イギリスから独立後、マラッカ、ジョージタウンの都市形態に大きな影響を与えたものとして、1966年に施行され、2000年に撤廃された家賃統制令がある⁴⁾。戦前ショップハウスを多く抱えているマレー半島の大中小都市の歴史的市街地は、家賃統制によりショップハウスの不動産取引が長期にわたり沈滞し、開発圧力から離れたものが多かった。所有者や生活者、民間保存団体の努力により単体中心の保存事例があるものの、マラッカとジョージタウンの歴史的市街地に生きている伝統的な生活文化は、保存制度により巧みに守られてきたものと言いき難く、不動産取引の沈滞により激しい新陳代謝から逃れ生き残った結果であると言える。これまで絶えず異質な存在を受け入れ、そして時間をかけて形作ってきた時代と異なり、家賃統制のもとテナントの健全な入れ替えが阻害され⁵⁾、長年住み続けている者とその高齢化、長く営んできた伝統産業とその斜陽化、そして人口減、観光地化が両都市に新たな痕跡を刻んでいる。

2000年の家賃統制令の撤廃は、人間居住の視点では居住権の変化を意味し、住宅管理の視点では「テナント＝管理者＝維持修繕者」構図の崩壊を意味する。戦前ショップハウスが形成した歴史的環境、居住環境をコンズとして捉えるとき、土地・建物の売買権限をもっていない、日々の生活を営んでいるテナント（生活者）はもはや唯一の当事者ではなくなり、所有者がしかるべき位置に戻った。パブリックの視点において、ショップハウス市街地は純然たる居住者たちの「生活の場」だけでなく、所有者が運用可能な「資産」として不動産市場に引き戻される。「伝統的な生活の場」はこれまでと異なった公共性が付与され、「資産運用」と格闘しながら維持されていく。2008年以降、その外側に、更に「世界遺産」がオーバーラップされるようになった。

(3) 世界遺産として

マラッカとジョージタウンが世界遺産として選ばれた3つのクライテリア⁶⁾：

- ◇ 基準 ii 「人類文化の発展に重要な影響を与えたもの」：500年にわたってマレー、中国、インド文化と3つのヨーロッパ植民勢力により形成された時代別多文化的な都市形態、建築、技術、モニュメントが刻印している。
- ◇ 基準 iii 「現存するか、既に消滅してしまった伝統や文明の手がかりを示すもの」：アジア・ヨーロッパの多文化的伝統が、宗教建築、居住地、言語、宗教行事、舞踊、服装、芸術、音楽、料理と日常生活に生きている。
- ◇ 基準 iv 「歴史の重要な段階を物語る建物や景観」：東アジア・東南アジアに見られない諸文化の影響を受けた建築と街並み景観が残っており、特にポルトガル、オランダ時代にも遡るショップハウスとタウンハウスの存在。

マレーシア政府は、800ページにも及んだ世界遺産の推薦書に、現行の歴史的建築物の保存条例・ガイドラインを盛り込み、保存制度の完備をアピールした。しかし、前述したように、マラッカ・ジョージタウンの生きている有形、無形文化は、保存条例・制度の効果的運用により守られてきたものであると言いき難い。保存対象として都市計画マスタープランのような上位計画に位置づけられた歴史的建築物、例えばBok House、Metropole Hotel、Eastern Hotel が行政の許可の下、取り壊された事例⁷⁾は枚挙にいとまがない。前節に述べたように、マラッカ、ジョージタウンをはじめ、マレー半島多くの古い市街地に見られる伝統的なショップハウスとその生活文化の継承は、家賃統制下の社会・経済状況から生まれた産物とも言える。間口が狭く奥行が深い敷地をもち、長屋形式で連担している戦前ショップハウスが、開発コストが不透明な市街地を構成していた。ジョージタウンの民間組織が家賃統制のタガが外された後の状況を憂慮し、その代替システムの構築を世界遺産に求めた。申請の動きは1998年頃ジョージタウンから始まった。

2000年の家賃統制令撤廃と2008年の世界遺産登録、短い期間に、両都市はこの2重のインパクトを受けている。生活者は家賃統制令撤廃のインパクトを理解できていたのに対し、「世界遺産」そのものをはじめ、その影響力についてはほとんど知らされていなかったと思える⁸⁾。流動も変化も、紛れもなく両都市のアイデンティティをなしているが、世界遺産登録後、古い痕跡が無防備に消耗され、ハイスピードに新しい痕跡に上書きされている。



図-1. 龍山堂邱公司街区



図-2. 龍山堂邱公司の祖廟と広場

3. 歴史的街区の「パブリック」考

(1) 生活がある観光地

少なくとも21世紀になったころまで、「外16間・内8間」⁹⁾と呼ばれていたジョージタウンの龍山堂邱公司 (Leong San Tong Khoo Kongsi) は、生活が見られる観光地であった。一銭も払う必要がなく、訪問者は自由に街区に入ることができ、邱公司の立派な祖廟と舞台を眺め、通過交通のない生活路や広場を散策し、そのこぢんまりした伝統的な住宅群の佇まいや生活感を五感で楽しみながら思い思い時間を過ごすことができた。公衆便所がなかった頃には住民が自宅のトイレを観光客に貸したり、話しかければ住民が界隈の歴史を語ったりしてくれた。住民たちは訓練されたガイドではなく、トイレを借りたり話を聞いたりすることに対し料金を払う必要もな

い。彼らはたまたま自宅前で休んでいる婆さんであり、買い物から帰ってきた奥さんやお昼を食べに帰ってきたご主人であった。言うまでもなく、そこは彼らの生活基盤である。トイレ貸しや歴史語りは、本来の生活を阻害しない程度「サービス」してくれるものであった。住民は長年来訪者の態度から、何となく自分たちが住んでいる場所は歴史的な価値があることに気付いている。来る人を拒まず、過干渉されることもなく、生きたままの邱公司をそのままの姿で触れることができる。その姿を感受する来訪者の「席」や「場所」は、遠い昔からすでに用意されているかのように、世界遺産の登録を待たず、当時の龍山堂邱公司はすでに世界のものであった。

住民全員が立ち退く前の2000年時点、街区には邱公司理事会の事務所建物以外、ショップハウス24戸のうち居住専用が20戸、業務専用が1戸、職住併用が3戸あった。居住歴50年以上の家族が半数を超え、居住歴100年以上は4家族あった。入居者が全員テナントであり、理事会が建物の所有者である。観光客が多く訪れるスポットにもかかわらず、意図的に整備された飲食店、お土産屋は皆無である。広場や路上では子どもたちが遊んだり、住民が雑談したり休憩したりしていた。旧暦7月、広場は祖廟の神事に使われ、中国オペラが舞台で行われる。その他にも新年会、忘年会など宴会の場として広場が貸し出される。街区が映画のロケ地として使われたこともある¹⁰⁾。来訪者に用意されている物理的な空間は、本来そこにあった、パブリックスペースでもある広場と生活路である。もともと生活者やコミュニティに共用されている空間が、そのまま各地からやってきた観光客たちにも開放されているに過ぎなかった。観光客は住民に話をかけたり、写真を撮ったりする。この光景は、家賃統制令の撤廃、住民が立ち退くまで長く続いていた。

このありふれた日常をそのままに接することができる環境は、共通したビジョンや目標設定により実現されたものではなく、意図をもったガイドラインや施策により導かれた結果でもなかった。観光客が大勢訪れることはつまり商機があることを、生活者も所有者も気付いていた。観光客を相手にしてフィルムやドリンクなどを提供することでふと潤うのだろうと考えた住民もいた。しかし街区の一角で事務所を構えている所有者である邱公司理事会は現状以外の用途、とりわけ観光客向けの商業活動に難色を示した。理事会がこの「外16間・内8間」をいつか全て回収し、自ら使用する考えをもっていた。その計画はまさに観光客向けの開発そのものであり、街区内全体の用途変更を狙ったものである。儲かっている建物の回収が難しいため住民の行動が黙認されなかつ

たと推測される。一方、懸案であった家賃統制令の修正・撤廃が長い間議論されているなか、居住権を主張できるように、所有者ができなかった建物の維持修繕を居住者が肩代わりに行い、大金を使って修繕・改修を行った居住者もいた。観光客から伝統的な生活が見られる重要性を思い知らされた居住者も多く、居住権の保持に向けて、建物や街区への貢献を意識していた。ただし、こういったような貢献や意識は、計画的に街区保存に反映できるように構築されたことなく、居住権を守るなど法的な代替措置も導入されなかった。当時の生活環境と観光のバランスは、このような家賃統制下の、使用権を取り戻そうとする所有者と、居住権を守ろうとするテナントの緊張関係から生まれたものである。この環境は、共有された目標やコンセンサスに基づいて形成されたものではなく、成立基盤は脆弱なものだったと言わざるを得ない。

2000年1月1日の家賃統制令の撤廃に向けて、1999年3月、邱公司理事会が弁護士を通して、その年末まで建物から転出するよう居住者たちに通告した。その後、期限は1年間延ばされたものの、住民全員が立ち退かされた。転出後の建物を理事会が自ら維持、修復することになった。理事会は街区をジョージタウンの観光中心地として位置付け、投資者に建物を修復する権利を与える¹¹⁾など、入居者を呼びかけたが、現時点に至り入居する者はまだ現れていない。

居住者がいなくなった後、街区内に入るために入場料



図-3. 居住者がいた頃の邱公司 (1999年)

が徴収されるようになった。訪問者の「席」や「場所」として、祖廟の下に併設された歴史展示室が加わった。以前のように、誰かの生活領域に入ってしまったような緊張感はなく、入場料を払ったため、そこに居る権利が付与されたかと思わせられる。観光客に向けられる眼差しは、生活している者のさりげない見守る眼から、スタッフの監視の眼に代わった。訓練されていない住民のオーラルヒストリーの代わりに、展示室のパネルや資料や模型が語ってくれる。入場料から収入源を得ている邱公司理事会は、以前よりも情報発信の力をもつようになり、街区全体をより効果的にプロデュースできるようになったと思われる。ギャラリーの開設、イベントやアトラクションの開催など、龍山堂邱公司在「生活がある場所」から「生活があった場所」として歴史が語られていく。

(2) 龍山堂邱公司街区にみられる「パブリック」

龍山堂邱公司のショップハウスはほとんど居住専用として使われていたが、その空間構成は職住一体のショップハウスと同じものであり、業務・居住の併用が可能な都市型住宅である。伝統的な利用例からみれば、ショップハウスには家族の生活、従業員の寝る場所、家族経営のお店や作業場、お客さんの買物や商談する場所まで確保可能な空間構成をもっている。「プライバシー」の捉え方はライフスタイルに伴い変化するものであるが、龍山堂邱公司の住民が自宅トイレを観光客にも貸していることは、つまり見知らぬ人が自宅のリビング・ダイニング・台所を通して奥のトイレの利用を許すことを意味する。ショップハウスとは言え、居住専用の一般民家へのトイレ借りは門前払いされても想像しがたいものではない。しかし、この街区の住民は違っていた。外部の来訪者に慣れている面もあり、自分が住んでいる場所は「価値ある場所」と自覚し、それを見に来る訪問者に対してもなしの意識が働いていたと考えられる。すなわち、居住専用住宅の奥にあるトイレは、家族生活にとってプライベート性の高い領域にあるにもかかわらず、「観光地」という異なった範疇の「パブリック」のオーバーラップにより、トイレの領域性はプライベートからパブリックに反転している。家に遊びに来る親戚や隣人を受け入れるリビングにも、このような「反転」が起きるが、対象は全くの見知らぬ人ではない。こういった「反転」(=変化)から生じる生活上のストレスがあるとすれば、ストレス低減のアプローチは2つある：すなわち、物理的な空間の分離・誘導による利用上の直接的な働きかけ、もしくは、使用ルールや意識、価値観の変化によるものが考えられる。龍山堂邱公司の場合は、観光客のために自宅トイレの位置を変え、アクセスを工夫し動線を迂回

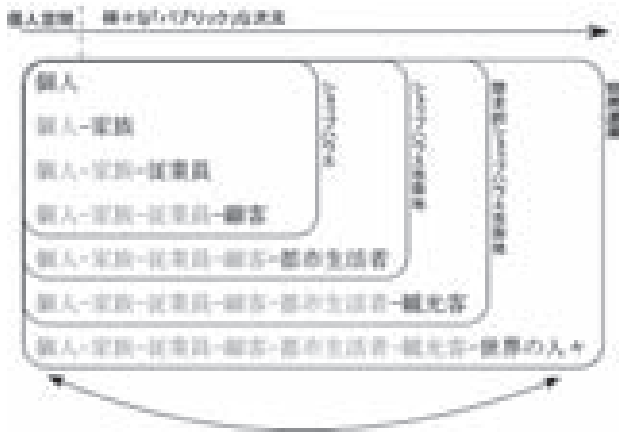


図-4. 個人空間と様々な「パブリック」な次元

するなどの物理的な空間操作は見られず、トイレ貸しは住民自身の意識変化により実現していたと推測する。なお、無視できない点として、多様な利用形態を可能にしているショップハウス元来の空間構成と、ショップハウスが一般的に支えてきた居住業務併用のイメージがその実現土台でもありと考えられる。

龍山堂邸会社の住民は、このように家族が中心に生活する領域の一部を観光客とシェアするという、「集団的に維持管理され誰でもいつでも立ち入れる領域」を創出した。「いつでも」とは言い過ぎだが、この空間は前出定義の「パブリック空間」に限りなく近いものである。ここで、「トイレ」の確保を、「席＝場所」の確保として捉える時に、この「席＝場所」は二重の意味をもっている。すなわち来訪者が使用できる物理的な空間としての「席＝場所」であると同時に、そこを維持管理する居住者の「席＝場所」もあることを意味する。そして無償で利用する訪問者にとっても、そのトイレをきれいに使用し、

生活を妨害しない責務が生じる。立場と役割は居住者と異なっているが、パブリック空間としてのこのトイレの維持に、訪問者もその責任を負う一員である。住民が生活を保ちながら、生活領域の一部をパブリック・アメニティとして提供し、街区全体の、従来空間の等質性の維持と矛盾せずに、来訪者の受け入れを可能にする空間の質を向上したと言える。この「パブリック空間」の目指したものは、歴史的街区の生きている生活に興味ある来訪者への居やすい環境の確保、居住者であるテナントがこの歴史的な環境づくりへの参加と貢献として解釈できる。

1章の「パブリック性」の「開放性」でみれば、この歴史的街区の価値を共有する対象は「観光客」まで拡大し意識されている。価値共有の実現方法について、次元が異なっているが、テナントも所有者も、「トイレ貸し」以上のことを考えていた。「排他性」からみれば、この歴史的街区から描き出すべき価値の所在、あるべき姿、その質の維持・管理する責任者・参加者は誰であるべきかに対し、テナントと所有者はそれぞれに思いをもち、接点は最後まで見つけられなかった。

龍山堂邸会社は誰のもの？ 理事会のものか。テナントのものか。みんなのものか。答えを試みることも自体が、その「パブリック」の範疇をなぞるようなものである。その街区の価値は何か誰と共有するか、その共有ルールは何か、そのルールをコントロールする人は誰か。「トイレ貸し」から「立ち退き」まで、幾重の「開放性」と「排他性」が拮抗するなかで、龍山堂邸会社の形態が作られてきた。パブリック性の高いもの＝開放を目指されているなか、家賃統制の導入により、テナントは居住権維持の意味で席＝場所が確保されたが、所有者には所有

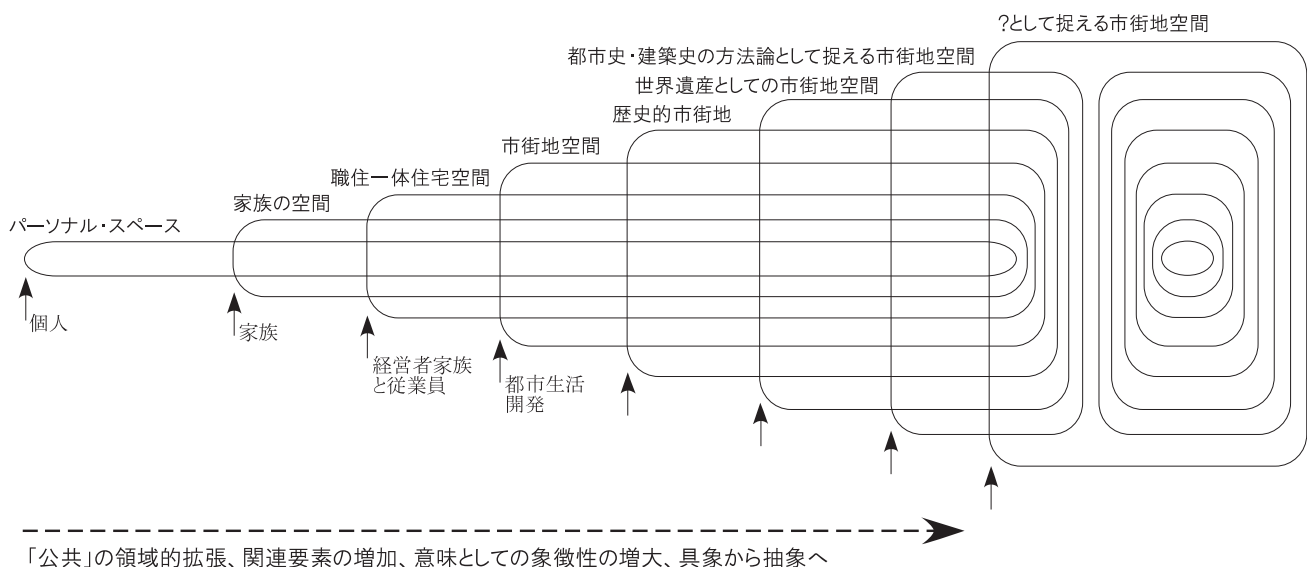


図-5. 公共の領域の拡張と生活空間

と管理以外、使用権はほぼ蚊帳の外に置かれた。観光や世界遺産で捉えられる時、龍山堂邸公司の場合テナント＝生活者ははじめから除外された。家賃統制の時代に、所有者のあるべき席＝場所に問題があると指摘されていたように、観光もしくは世界遺産の仕組みのなかで、テナント＝居住者が登場・参加可能な席＝場所は設けられていないことも長く指摘されている。「生活がある観光地」の龍山堂邸公司には、所有者、テナント、来訪者や観光客にも、しかるべき席＝場所があった。龍山堂邸公司を「アイデンティティ」の表徴として捉えるとき、街区は生活空間という実用的な機能をすでに失い、その存続理由は象徴性のみが残っているようになっている。「生活がある観光地」を「アイデンティティ」の表徴として捉える時、街区における「実生活」と「象徴性」の共存が求められる。その「パブリック」の範疇は「生活する場」のみならず、「来訪者・観光客の場」も含むようになる。この様相を保とうとする、所有者、テナント、観光客＝来訪者のそれぞれの席＝場所の確保について、特に家賃統制の撤廃、世界遺産登録といった「パブリック」の範疇を大きく変えようとする際、行政の力が重要であるがそれだけでは不十分である。「実生活」から「象徴性」まで、つまり実利的な生活と精神面の充実を両方満たすことに資する物理的な空間操作の可能性、または意識面・心理面の働きかけ方を模索するなかで、これまでになかった連携が必要になるはずである。その連携は、各ステークホルダーのあるべき席＝場所の確保から始まるとも言うべきである。邸公司の「アイデンティティ」は誰に向かってどのように示すものであるか。現行諸制度や世界遺産の仕組みに対する応用解釈はこの問いかけからはじまる。

4. ジョージタウンとマラッカ世界遺産の管理

(1) 世界遺産管理の方向

マラッカとジョージタウンの歴史的市街地管理の方向が異なっている。マラッカとジョージタウン両都市も政府主導のものであり、生活者を代表できるボトムアップ型の参加はまだ現れていない。

ジョージタウンは伝統的に、民間の意見を州政府に反映しやすい土壌をもっており、民間組織や個人が盛んに声を上げ、政府も、その声を汲み上げる柔軟性を示している。それに対し、マラッカは完全なトップダウンの形をとっている。官民協力の面において、ジョージタウンでは、民間の指摘を受けた自治体が許可を取り下げ、内容を修正するのに対し、マラッカではこのような指摘・批判・フォローは表に出ていない。



図-6. ジョージタウンの旧暦正月

ジョージタウンの民間組織が世界遺産登録推薦の際に大きな貢献したと考えられる。ただしこの過程は一部の民間有志（場合に有償）により成し遂げられたものである。世界遺産登録後に発生し得る諸問題を想定しながら、それらをコントロールする有権者である住民・所有者を巻き込むことをしなかった。

近年の保存・整備活動から、マラッカでは州政府主導のもと、観光客誘致を最優先し、世界遺産の登録をきっかけにテーマパーク化を加速している。

ジョージタウンは野心的な観光開発をしていない。保存推進のNGOと開発利権に群がるディベロッパー両方に州政府が耳を傾けている。面積、歴史的建築の数はマラッカの3倍近くあるジョージタウンでは、歴史的建築の転売、取り壊し、不法改修、居住者立ち退きなど、保存と開発の動きが激しくせめぎ合っている。伝統的な生活に無関心かと思われるほど対策づくりが遅れている。不法工事、不動産価格の高騰等が起り、政府の無策が批判的になっている。

(2) ジョージタウンにおけるWHIの設立と

民間組織の役割

世界遺産に関する政府機関内の管理担当者は、ほとんど地方政府職員により構成されている（世界遺産推薦書参照）。ジョージタウン・マラッカ両都市において、対応しているスタッフのほとんどは従来の都市計画、建築部門の担当者である。彼らは土木、上下水、都市計画や建築申請の専門職員であり、世界遺産登録後も従来の仕事をしながら世界遺産の管理業務を兼担している。従来の職能では対応できない建築史や、文化遺産の管理、生活文化など無形遺産の保存を外部の専門家や有識者の意見を受け入れ判断している。

その窓口として、世界遺産登録後、マラッカとジョージタウンにそれぞれ世界遺産事務局（World Heritage



図-7. カフェに転用された元コーヒー工場

Office =WHO) が設けられた。ジョージタウンでは2010年に世界遺産公社 (World Heritage Incorporated = WHI) を設立し、外部意見を取り入れながら遺産サイトの管理・研究・広報・監視活動を行う。公社の執行責任者 (ジェネラル・マネージャー = GM) は、州政府が任命する者であるが、WHI 専属の職員である。

世界遺産登録翌年の2009年、世界遺産事務局WHOの設立とともに、ジョージタウンでは民間の諮問団体「CHAT」¹²⁾ も組織された。CHATは、保存・修復建築家、歴史・教育専門家、遺産保存活動家など、民間の有識者7、8人を中心に構成されている。メンバーはボランティアの形で非定期に開催される会議に出席する。WHO (後のWHI) が政府の要請や課題に応じ、会議を設定し、政府スタッフ、CHATメンバーを会議に招集する。議論の内容は、保存ガイドラインの検討、世界遺産に対する意識向上方策、不法建築活動の監視、建築申請物件のチェック、ホテル営業許可のあり方、看板の統制など多岐にわたり、実質的な問題解決、方策提言を目指している。ジョージタウン歴史的市街地の保存ガイドラインはほとんど民間の手によるものであり、ユネスコに提出する予定のジョージタウンのSpecial Area Plan (SAP) の建築ガイドライン草案も基本的にCHATが作成したものである。

歴史的建築の保存ガイドラインはまだ徹底的に周知されておらず、それを用いて指導できる体制も十分に整っていない。CHAT が建設業者向けのガイドライン説明内容を構築し、伝統的建築の修復指針の説明会開き、その内容をウェブ上に公開する。一般市民がショップハウスを理解するように、マンガ風のパンフレットを作成し配布する。政府が周知すべき多くの情報は実際CHATが代わりに公開し、行政機能を補完している。彼らは現場を熟知しているだけでなく、世界遺産の理念を理解しており、遺産サイト管理に不足している部分を察知し問題提起して可能な限り自ら補完する。その活動は、行政



図-8. 観光客で賑わうマラッカ



図-9. 新設された水車

の指導方針に直接に反映されている場合が多い。専門家の監視活動で摘発された不適切な建築行為は、実は市に許可された工事の場合もある。市が専門家の指摘に従い、修正指示を出すのが、開発者が損失を被る。このようにジョージタウンでは、多くの非公式的な見解が公式的な見解を導いている。これは、活発な民間活動、行政側の対応、民間と行政の間にあるWHIの働きによるものである。ただし、責任所在の曖昧さは、時に行政、開発者、専門家間に軋轢を生じさせる。具体的な問題点と民意集め、その必要性を訴え、行動に反映させる現行の仕組みでは、善意的な非公式の見解を多く集め、共有していく必要である。

(3) マラッカにおける世界遺産管理の実態

トップダウンの体制で身を固めているマラッカでは、博物館の研究者が遺産管理の担当者に含まれているが、ジョージタウンのような、歴史研究、市民教育活動、古建築の修復等を携わりながら、世界遺産サイトの管理に参加し、活動資金を自ら確保している方がほとんど見られない。マラッカは歴史都市でありながら観光業が早い時期に発達している。地理的にシンガポールに近いため、国内外の観光客が大勢賑わう場所である。マラッカは「世界遺産」を観光地の「看板」としか捉えていない。

世界遺産登録後にも多くのアトラクションが追加された。マラッカ河の両側の歩道整備、川に遊覧船が導入された。遊覧船の定常運航を保つために、河口部に水位調節の水門が建設された。河口両側の古い倉庫群が取り壊されホテルや住宅が建設された。世界遺産としてのオーセンティシティへの配慮の欠如を新聞で指摘されるが、政府の耳を傾けさせるほどの力をもっていない。政府はむしろその「諸工夫」がもたらした観光効果を誇示している。

マラッカの都市組織を形成してきた人々は表から影を潜め、裏から都市を支えることに変わった。世界遺産サイトの管理・運営について、行政の対応に対し満足している民間有識者、専門家はほとんどいない。ボトムアップの機能がほとんど働かないマラッカ世界遺産の行方は、政治家や行政担当の倫理感覚と文化遺産の認識に委ねられている。マラッカでは、ユネスコやイコモスによるモニタリングに対応するために、不都合な情報は以前よりも流しにくい状況にある。大衆による監視の代替手法が要請され、マスコミ関係者（記者）、NGO、住民の間からも失望感と閉塞感を感じるという。

全体的に、2009～2011年の3年間、ジョージタウンの有識者の間に、次のような知識に対するニーズ変化があった。「世界遺産と観光」→「世界遺産サイト管理のための組織と仕組み」→「歴史的都市の有形・無形遺産を守るための住民・行政の巻き込み方」。行政に対し、内部組織の変化、意識変化を求める声は2009年には多かった。行政と協働しながら、有識者たちは「変化を相手に求める」ことから、「変化を相手に仕掛けていく」ことに興味をもちはじめた。世界遺産に対し、一般住民・経営者の意識も希薄であるため、有形・無形遺産の保存に向けて民間組織の活動により多くのステークホルダーを巻き込む方法が必要である。無関心、組織化されていない群衆がほとんどであり、無関心や無関係を関心や関係することに転換するまちづくり活動は現在試みられている。

本稿は、科学研究費基盤研究(C)(2009-2011)「マラッカ・ジョージタウン世界遺産のボトムアップ保存手法構築のための調査研究」の研究成果に基づき構成したものである。第4章は、張漢賢2013『マラッカ・ジョージタウン世界遺産管理の課題—ボトムアップ保存手法構築の視点から—』、日本建築学会中国支部研究報告集36巻、p.p.791-794より再編・加筆したものである。

【註】

- 1) 文献1) p.10
- 2) 文献2) p.102
- 3) Straits Settlements 1826-1946. 海峡 (Straits) と連帯した地域イメージが強く、今でも、シンガポールの主力英文紙に「Straits Times」、マレーシアには「New Straits Times」がある。
- 4) 詳しくは、文献4)、文献5)などを参照のこと。
- 5) 家賃統制令で既得権をもっているテナントの身分放棄が少なく、所有者にとって不平等となる又貸しによる変動はみられる。文献5)。
- 6) <http://whc.unesco.org/en/list/1223>をもとに、筆者仮訳。
- 7) Badan Warisan Malaysia 2006
- 8) 筆者、2008年現地調査。
- 9) 住民による呼ばれ方。「間」：戸の意味。
- 10) ハリウッド映画「アンナと王様」、1999年。
- 11) 2008年7月17日、Starmetro。
- 12) Cultural Heritage Alliance Team または Cultural Heritage Action Team

【文献】

- 1) ヘルマン・ヘルツベルハー、森島清太訳1995『都市と建築のパブリックスペース』、鹿島出版会
- 2) 齋藤純一 2000『公共性』、岩波書店
- 3) ハンナ・アレント、志水速雄訳1994『人間の条件』、ちくま学芸文庫
- 4) 張漢賢2001『アジア都市のショッピングハウスに関する研究 その8. マレーシア・ジョージタウンにおける家賃統制令撤廃前後の統制家屋の維持管理の実態』、日本建築学会大会学術講演梗概集F、日本建築学会、p.1017-1018
- 5) 張漢賢 2000『マレーシア・シンガポールにおける街路型職住複合建築「ショッピングハウス」の展開—その空間の融通性と持続的利用—』、京都大学博士論文、

ABSTRACT: The aspect of 'public' appears in many ways of its variety of participation. Diversity of 'public' consideration has power able to totally change the meaning of architecture or urban space, which formed the urban culture stratified. In other words, the manifold 'public' is a source of shaping urban and architecture culture. 'Publicness', can be understood as an aspect of competition between its dual nature of exclusiveness (a will to identify or fix) and openness (a will to share values). The phase of competition change, guided by the target of identification establish for. This study introduces the situation of management of World Heritage site of Melaka and George Town, Malaysia in the viewpoint of 'public'.